



後編サンプル

あれから散々犯されたカイトは、両足をこれ以上ないほど大きく左右に開かされた状態で、拠点の太い流木の柱にがっちりと括りつけられていた。

カイトの顔面には、佐伯が身につけていたネクタイが幾重にもきつく巻きつけられ、その視界を完全に閉ざしている。さらに、ナイフで適当に削ったであろう、ささくれの残る太い木の枝が、小さな口を裂かんばかりの勢いで奥深くねじ込まれていた。両端を頑丈な植物のツタで後頭部へガチガチに縛り上げられた即席の猿ぐつわのせいで、カイトは顎を固定されたまま、閉じることも許されない口からとめどなく唾液を溢れさせ、ただ「……ん、う、ふーッ、んーッ！」と、鼻を鳴らすだけの哀れな獣へと成り下がっている。

完全に無防備に晒されたカイトの割れ目からは、先ほど三人の男たちにこれでもかと注ぎ込まれた白濁が、ごぶっ、ごぶっ、とみだらな音を立てて絶え間なく溢れ、太ももを真っ白に汚しながら床へとボタボタと垂れ落ちている。

それをいやらしい笑みを浮かべながら見下ろす3人の男たち。

汗と泥、そしてカイトから搾り取った蜜で濡れた身体を誇示するように、シゲ、ショウ、佐伯は、ぐったりと調教され尽くしたカイトの家畜のような姿を品定めするように眺めていた。

「いい恰好じゃねえか」

シゲが下卑た笑い声を上げながら、カイトの太ももを容赦なくパチンと叩いた。

その衝撃でカイトの身体がビクッと跳ね、前後の穴からさらにドロリと濃厚な種汁が吹き零れる。

「せっかく注ぎ込んでやった極上の種だ、零さねえように蓋してやる」

固い異物がカイトのドロドロに広がった前後の穴へ、容赦なく突き刺さる。

「……ん、うっ！んーーーーー！」

声も出せないカイトは、肉体を襲う痛みにビクビクと怯え、ネクタイの奥の瞳からボロボロと涙を流すことしかできなかった。

男たちが狩りや作業に出かけ、しんと静まり返った拠点。

遠くで聞こえる波の音だけが、カイトの奪われた聴覚を虚しく揺らしている。

さっきまであれほど激しく蹂躪され、男たちの獣のような息遣いや、下卑た笑い声、肉のぶつかるおぞましい音が溢れていた空間が、

今は嘘のように静かだ。その「誰の気配もない」という圧倒的な孤独が、カイトの心を内側からじわじわと食い荒らしていく。

(だれか……だれでもいいから、おねがい……っ)

思考を奪うほどの激しい快楽と苦痛の中にいた方が、まだマシだった。

誰もいない闇の中、一人きりで木の柱に縛り付けられていると、嫌でも己の身体の異常な現状を意識させられる。

カイトの体内で男たちの精液が熱く温まっていく中、前後の割れ目には、ヤシの油をたっぷりと塗られ、ツルツルとした肉厚な葉で包まれた二本の杭が深く根元まで突き刺さっていた。

ヌルヌルと滑らかな異物が、容赦なくカイトの柔らかい粘膜を内側からぐいぐいと圧迫し、逃げ場のない強烈な充満感を絶え間なく与え続けている。

「んっうっ、ん……………うううっ」

ほんの少し身体を動かすだけで、油を吸った葉が肉壁をみだらな音を立てて 蠢き、声にならない悲鳴が口の中に虚しく響く。

「んっうっ、ん…………うううっ、んんーっ！」

柱から抜け出そうと、ほんの少しでも身体を動かせば、容赦なく杭が引き絞られた窄まりを内側からガリガリと抉る。

声にならない悲鳴が口の中に虚しく響き、カイトの身体は小さく跳ね上がった。だが、その衝撃でさらに杭が奥へと食い込み、粘膜を押し広げる。

（もう、嫌だ……ッ。だれか、…おねがいだから……っ）

目蓋の裏は真っ暗で、世界のすべてに置いていかれたような恐怖がカイトを支配する。

もしもこのまま、あの男たちが戻ってこなかったら。自分はこの柱に縛り付けられたまま、

口を塞がれ、前後の穴を杭で塞がれたまま、誰にも気づかれずに干からびて死んでいくのではないか。

（こわい……、こわい、こわいこわいこわいこわい怖い……っ！！）

心臓の音が耳の奥でうるさいほどに脈打ち、ネクタイの奥から溢れた涙が、頬を伝って木の枝の猿ぐつわを濡らしている。

どれだけの時間が経ったのかもわからない。数時間なのか、それとも数日なのか。

時間の感覚さえもドロドロに溶けていく闇の中で、カイトはただ、自分が流し込まれた精液を保管するためだけの「生きた器」として放置される恐怖に、ガタガタと震え続けることしかできなかった。

放置されている間、自分の身体が男たちの種を吸って、じわじわと「雌」に作り替えられていくような、おぞましい熱さが下腹部に居座り続けている。

置いていかれるのが怖い。死ぬのが怖い。けれど、それ以上に恐ろしいのは、あれほど自分を蹂躪した男たちの足音が近づいた瞬間に、「やっと暗闇から解放される」と、心のどこかで安堵してしまうだろう自分自身の狂気だった。

その時、静寂を切り裂いて、ザザッと草むらを分けて近づいてくる複数の足音が聞こえた。

恐怖に心臓が跳ね上がると同時に、最悪なことに、カイトのナカの割れ目がヌルリと杭を締めつけて歓喜の蜜を分泌する。

「おおー、ちゃんと大人しく留守番してたみたいだな」

足音と共に戻ってきた男たちのうち、ショウがカイトの股間を覗き込み、容赦なく、一気に前後の杭を引き抜いた。

杭が抜かれた瞬間、中で密閉され、カイトの体温でドロドロに熟成された大量の白濁が、ポンッ、と空気が抜けるようなおぞましい音と共に、ドバァッ、と勢いよく溢れ出す。

「んうっ…！」

異物から解放された安堵も束の間、堰を切ったように溢れ出た大量の種汁が、地面にぼたぼたと落ちて汚していく。

杭のせいで完全に開きっぱなしになり、中身をぶちまけて
ピクピクと 蠢く無防備な粘膜は、男たちの狂った性欲をさ
らに煽るだけだった。

空気に触れて一瞬だけ冷えそうになったカイトの割れ目へ、
間髪入れずに、シゲの猛り狂った巨大な質量が割り込んで
いく。

ぐちゅうっ、どちゅツツツツツツツ♡♡

「んううー————♡♡ッ！！」

完全に無防備だったカイトの最奥まで、肉壁を無理やり押
し広げながら、狂暴な硬さが一気に突き刺さる。

シゲの凶暴な質量に激しく突き上げられるたび、もう一つ
の空いた孔からは、逃げ場を失った種汁がごぷごぷとみだ
らな音を立てて噴き零れた。

頭を殴られたような衝撃、それまで冷たく硬い木の杭に苛
まれていたカイトの肉体にとって、割り込んできたそれは、
信じられないほどに生々しく、凶悪なほどに熱かった。

(あつい、熱い熱い熱い熱い熱いはいはいはいーっっ
♡♡)

ネクタイの奥で白目を剥き、カイトの全身がガタガタと歓喜に震える。

恐怖していたはずの男たちの肉欲。自分を蹂躪するはずの、おぞましい欲棒

それなのに、冷酷な異物で放置されていた時間が長すぎたせいで、カイトの壊れかけた脳は、その圧倒的な「人間の肉の熱」を、極上の救済だと勘違いして受け入れてしまう。

「あ？ おい見ろよ、このメスガキ……ッ！」

シゲが驚いたような、弾んだ声を上げた。

柱に縛り付けられ、身動きが取れないはずのカイトの腰が、自らシゲの股間へと向かってむち打ち、ペニスをより深くへと迎え入れるように 蠢き始めたのだ。

(もっと、もっときて……ッ、なか、あつくして……ッッ♡)

嫌だ、怖い、助けて。そう泣き叫んでいたはずの心はどこかへ吹き飛び、

今のカイトを支配しているのは「もっとこの熱い塊で中をめちゃくちゃに埋め尽くしてほしい」という獣めいた本能だけだった。

木の枝の猿ぐつわをガチガチと鳴らし、よだれを撒き散らしながら、カイトは無様に、必死に腰を振って強靱なペニスが強請り続ける。

「へえ、置いてけぼりにされて相当寂しかったんだな？ 杭なんかより、俺たちのちんぽの方が欲しくてたまなかったんだろ！」

カイトのあまりの淫乱な裏切りに、男たちの興奮は最高潮に達する。

自ら腰を振って肉の棒を貪るカイトの身体は、完全に男たちのモノとして、引き返せない領域へと堕ちていくのだった。